

第34回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 「日本の社会と文化への適応」

国際言語文化センター主催の第34回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会は、「日本の社会と文化への適応」というテーマで2012年12月8日（土）午後1時から甲南大学811講義室で開催され、56名の参加者があった。

◆開催日時 2012年12月8日（土）13時～16時20分

◆受付時間 12時30分～

◆開催場所 研究会：甲南大学8号館1階 811講義室
懇親会：甲南大学 生協2階 レストラン

◆次 第

13：00～ 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 教授 中村 典子

13：05 〈第1部〉基調講演：ソーシャル・サポートから見た留学とホームステイ
一言語能力のレベル差は適応にどう影響するか—
国際言語文化センター 教授 原田 登美
(第1部司会：国際言語文化センター 准教授 石井 康一)

13：55～ 休 憩

14：05 〈第2部〉ゲストによるスピーチ：日本の社会と文化への適応に関する経験
Whitnee Giles 氏 (ホイットニー ジャイルズ)
〔アメリカ人：大阪市政策企画室 国際交流員 (CIR)〕
Lara Makowski 氏 (ララ マコウスキ)
〔ドイツ人：ケルンビジネススクールからの留学生〕
Patrycja Sojka 氏 (パトリーツィア ソイカ)
〔ドイツ人：ケルンビジネススクールからの留学生〕
Jeremy Pichot 氏 (ジェレミー ピシヨ)
〔フランス人：元・兵庫県国際交流員 (CIR)〕
姚 小佳 氏 (ヨウ ショウカ)
〔中国人：近畿大学経営学部会計学科 助教〕

15：05 パネルディスカッション

15：45 質疑応答 国際言語文化センター 教授 中村 耕二
(2部コーディネーター&司会)

16：15 閉会の挨拶

16：30 懇親会

第1部 基調講演

「ソーシャル・サポートから見た留学とホームステイ」
一言語能力のレベル差は適応にどう影響するか

国際言語文化センター教授 原田 登美

原田登美氏は1981年に甲南イリノイセンターの日本語の講師として勤務するようになった。イリノイセンターの教育目標は世界で活躍できる人材を育てる為に、ホームステイという体験を通して日本人と実際に交流し、日本語を習得するというものであった。イリノイ大学はアメリカ全土から学生を募集して、甲南大学に派遣するために、キャンパスが必要であった。そのために1976年から甲南大学での日本語教育が始まった。

氏は著書『留学生の動機とホームステイ—ソーシャル・サポートによる異文化適応へのプロセス』を出版し、それに基づきホームステイの意義と日本語習得・日本文化理解の有効性について話された。

1976年からYear-in-Japanと呼ばれ、10ヶ月のホームステイをしながら、甲南大学で日本語を学習するプログラムが開始された。氏は多くの教育機関で日本語を教えて来たが、本学の留学生は特に日本語の習得が他の教育機関よりも早いと認識した。甲南大の留学生は日本及び日本人に対する関心が高く、日本文化・習慣や考え方などに慣れ親しんでおり、言語習得の効果は、留学生がホームステイを1年間体験することと大きく関係している。

著書は、第一部と第二部とに分かれており、第一部は、日本語留学についての学習動機を英語との比較で論じ、第二部はホームステイの意義と言語習得について論じている。氏は本日の講演で先ず第一部の留学の動機について話された。

留学体験は学習のモチベーションと深く関係があり、本学で留学している提携大学からの留学生を研究対象として、学習の自己決定理論を中心にその調査・研究を報告した。この理論は、自分が自らの行動の決定にどれだけ関与しているかという事であり、言い換えれば、自分が目的意識を持ち自らの意志で留学し、日本語の勉強をしているのかどうかと言語習得に大きく影響する。氏は来日した時点と留学5ヶ月後の時点での留学生の意識調査をした。自己決定の低い段階から高い段階と様々な段階があるが、自己決定度が高いという事は、自分の内的な欲求や自由意志で留学しており、学びに対する情熱も高い。一方、自己決定度が低いということは、親から無理やり留学を勧められたり、教師に言われた場合や、成績のためという外的要因からの影響で留学し、日本語を学び始めたことが考えられる。自己決定度が高くなると、自分の中に学びたいという心の欲求と、留学して学んでいるという事実とが一致して、内発的動機という最終段階になる。

氏は留学のために来日した直後の日本語学習に対する動機と5ヶ月後の動機、あるいは8ヶ月後の動機がどのように変化しているかを調査・研究した。質問項目を決めて学生にインタビューを行った結果、「日本で日本語を勉強していて嫌になったことがない。」「日

本人と毎日会えるし、日本人と生活しているので、日本語を使う機会が常にある。」「自分のことを表現したい、相手のことを理解したいということで日本語を勉強したい。」という答が得られた。

自己決定率は、来日時57.14パーセントが、94.8パーセントと高い動機付けの決定になっている。つまり留学というのはそれだけ学習動機と学習意欲面でプラスになっている。

もう一つは、日本語と英語の学習において、いかに動機が違うのかという調査を行った。氏は2008年カナダのビクトリア大学で在外研究をした際、ビクトリア大学に留学している世界各国からの103人を対象に、なぜ留学してまで英語を勉強したいのかという調査をした。その結果、日本語の場合統合的志向、英語の場合道具的志向であることが分かった。

日本に留学する人達は、日本人の考え方や文化を習いたい、そのために日本語を勉強したいという統合的動機が多い。一方英語の場合、英語を学んでいると世界のどこでも生きていけるし、社会的地位も得られるという動機で始める学生が多かった。日本から外国に留学した場合、沢山ホームステイが行われている。日本の場合は住居事情もあり、ホームステイは容易に見つからない状況である。甲南大学のホームステイは歴史がありよくオーガナイズされている。ホストファミリーはリピーターが多く、長年やっている人が多い。

良い対人関係は、人にどのような影響を及ぼすのかという観点でのソーシャルサポートという概念がある。人が人を助け、支えることで困難を乗り越えられると言われるソーシャルサポートは、「社会的支援」とも呼ばれ、道具的サポートと情緒的サポートの2種類がある。道具的サポートには、言語的・情動的・経済的サポートなどが挙げられる。情緒的サポートは、精神的にどのように寄り添ってくれるか、また、励ましてくれるかという気持ちの面でのサポートと理解される。

氏の著書の中に異文化適応という言葉が何度も出てくる。異文化適応とは、留学生が日本に来て良かったと満足している、また、ホストの人から快く受け入れられていると感じることができるかということである。異なる文化圏から日本に来るということは、異なる言語を使い異なる文化に適応しなければいけないということであるので、様々なストレスがある。

氏の研究では、ホームステイをしている家庭でソーシャルサポートに関して、2つの役割をホームステイが果たしているという仮説を立てた。一つは、ホームステイを通して日本語が上手になる。もう一つは、日本の社会に適応するのを促進する役割を果たしているということである。この2つを研究して検証するというのが今回の調査である。日本語能力差によって、日本に適応するにはどのような違いがあるのか、またソーシャルサポートをどのように感じているのかを調べたいと思った。レベルによって違うのではないかというのが氏の仮説である。調査の対象学生は72名。氏の仮説を補強してくれる仮説は『異文化に接触すればするほど、コミュニケーションもうまくなり、適応もうまく進んで行く』という仮説である。この最も顕著な例がホームステイでないかと考える。

ホームステイに対する満足度は比較する対象がある方がはっきり分かる。本学ではホー

ムステイだけでなく、寮を選択することもできる。ホームステイの対象は72名、寮は17名。数字的には信頼度の少ないデータでもあるが、より調査を客観的にするために取り入れている。

5点満点で調査をした結果、ホームステイは前期4.38、後期4.39、寮は前期3.88、後期3.47となった。ホームステイの質を維持するのにかなりの努力が必要。寮は後期になるとその満足度が下がっている。ホームステイについてどういったところに満足しているのか、これを正の評価としている。また、困った点は何か、記述式で書いてもらって内容分析をした。

ホームステイについての肯定的な評価項目（高い順）

1. 日本語のコミュニケーションの練習と上達
2. 暖かい家庭と家族の提供。前期では2番目だが後期では1番になっている。
3. 日本人社会やクラスの支援、例えば銀行・市役所に連れて行ってくれた。
4. 日本人家族と一緒に暮らす体験による学び。いただきますとか行って参りますとかの挨拶の習慣。
5. 日本文化の理解と学習「お仏壇に毎日手を合わせるホストファミリーを見て、びっくりした。」などホームステイをしなければ得られないような経験。
6. 良い食生活と住居の保障 当たり前のことだが、甲南大学のホームステイでは2食（朝と晩）提供されている。「暖かい屋根の下で暮らせることが嬉しかった。」
7. 人間形成と成長の支援 大人になるのに助けてくれた。

ホームステイについての否定的な評価項目（低い順）

1. 文化・生活習慣・考え方による違い「自分はずっと一人で暮らしていたので、ここでホストファミリーと一緒に暮らせと言われても、なかなか馴染むことができない。」
2. 不十分なコミュニケーション能力による困難 「日本語が十分でないということから、ホストファミリーに理解してもらえなかった。」「自分も理解できなかったので、ミスコミュニケーションという問題がとて大きかった。」「日本人の場合、言わなくてもわかるだろうという面がとて多い。」
3. 「自由がなく窮屈だ。」「帰りの時間が縛られている。」
4. 不便な生活 「インターネットが十分に使えなかった。」
5. 家庭での孤立「家族の中で自分が一人だった。」
6. 食生活の不慣れと遠慮 「日本の食事が食べられなかった。」「もっと食べたいけど日本人は食が細い。」「お腹がすいているということを言えない。」「お腹がすいて眠れなかった。」
7. 家庭内不和「親子喧嘩がすごかった。」

8. 逆カルチャーショックへの心配 「あまりにも日本人の家庭に馴染みすぎて、帰国したらどうやって暮らしたらいいんだろうか。」「寂しすぎる。」

寮のマイナス面：

「寮にいたら日本に来なくても良かった。学校では日本語を勉強したけれど、休みの日には日本人と会うことはなかった。」「日本語を話す機会がなかった。自分の国にいるのと変わらなかった。」「食事の心配をいつもしなければならなかった。」「日曜日と祭日には食事の提供がなかった。」「食費が高くついて困った。」「孤独だった。」「日本に関する情報が入らない。」

ホームステイでどんな日本語能力が向上しているのかという調査で、注目する点はレベルの低い学生ほどホームステイを一番高く評価していることである。

仮説：ホームステイで日本語運用能力が伸長する。ホームステイに満足しているということと日本語が伸長するということがすべて正の方向で一致している。

関連した意見：「日本語のコミュニケーションと日本文化の理解の上でホームステイの役割は自分たちに大きかった。」「いろいろな話題を話してくれた。聴解能力が伸びた。」

自尊感情：自分がいかに大切な人間であるかは言語と関係している。特に日本で学ぶ留学生は、日本語の運用能力があるかどうかで、自分に対するプライドが異なってくる。日本語のレベルによって留学生の自尊心が高まってくる。来日5か月目までは、ホームステイの満足度は日本語のレベルが低い留学生の方が高い。日本語力が中・上とレベルに上がるに従って、次第に日本人からサポートを受けているという評価が下がってくる。日本語が出来ない人は周囲のサポートをととても有難く感じている。異文化社会の適応と自立は、日本語習得と習熟度と大きく関係している。日本語ができる人は適応が早い。

同じ質問を5ヶ月目と10ヶ月目で繰り返して尋ね、時間の経過につれてどのような変化があるのか調査した。日本語力のレベル別の調査では、低いレベルの留学生ほど日本語のテストの結果が伸びている。上級レベルはそれほど日本語力が伸びていない。Can doの発話力（自分で自分のことを評価する）によると、日本語能力の各レベルによって顕著な違いがある。ホームステイに関しては日本語運用力レベルの低い人達は来日した時点ではホームステイの意義を高く評価している。8ヶ月目になると下がってくる。中上級のレベルの人は、段々ホームステイの意義について理解が上がって行く。これは親近感も同じである。

要するに、留学生の日本語力が身についてきたことと文化適応の相関があるということである。最初はホームステイの家に閉じこもっていても、日本語能力が向上してくると、友達もできるし、社会的にも活動的になってくる。その結果ホームステイの依存度が低く

なる。逆に、中上級の人達は次第にホームステイの意義を高く評価するようになる。それは、ホームステイが暖かい家庭を提供してくれたおかげで、安心した生活が送れることになったということである。日本語運用能力が低いレベルの学生も長期に及ぶと同様の結果になると思える。対人関係にしても日本語力があるということは、日本社会や文化にうまく適応しているということになる。日本に適応するには日本語の力が大きい。

日本に来て、誰もが日本社会にスムーズに適応するとは限らない。Kimのストレス適応（成長の心理モデル）では、スパイラルのようにストレスに左右されながらも、徐々に異文化に適応して、次第に成長して行くのである。

自分の文化と異文化というものは、ブランコのようにゆらゆら揺れながら行ったり、戻ったりしながら、留学生というのは徐々に日本の考え方、自分の考え方にバランスを取って、適応していく。これがダブル・スイングという考え方である。

第2部 ゲストによるスピーチ 日本の社会と文化への適応に関する経験

Whitney Giles (ホイットニー ジャイルズ) アメリカ合衆国コロラド州出身

(大阪市の政策企画室でJETプログラムの国際交流員)

大阪に2010年の8月に来ましたが、日本は初めてではありません。初めて来たのは4歳の時で、父の仕事がアメリカの海軍だったので、家族3人で日本に引っ越して来ました。当時は長崎県の佐世保に住み、10年間日本の学校に通っていました。そこで日本語を自然に習得しましたが、苦勞したことが2つあります。1つは中学校に入ってから、将来の進路に関する事で、二国間の文化の違いでした。両親ともアメリカ人で、自分の子供には何でもできると教え、小さい頃から様々な夢を持つように教育されました。当時はずっと日本に住むと思っていましたので、東京大学への進学希望を考え、将来はパイロットになりたいと思っていました。それを中学校の作文に書いて提出した後、担任の先生が母と面談をしました。面談が終わった時に、普段はいつも明るい母が、すごく落ち込んだ表情で教室から出て来ました。どうしたのと聞きましたら、「すぐアメリカに帰る」と言われました。その理由は何かと尋ねると、先生に「娘さんに嘘をつくことは止めてください」と言われたらしいです。なぜかと言うと、「東京大学は日本人の生徒のためにあるもので、外国人は絶対に入れません」と言われたそうです。それでパイロットに関しても、「女性ですから無理です」と言われたそうです。それに関してお母さんは憤慨しました。結局、半年後に米国に帰国することになりました。私としてはすごいショックでした。担任の先生にそう言われて、基本的にはすべてを失いました。それまで自分の故郷だと思っていた日本に裏切られたという気になりました。アメリカに帰国した時は、もう一生日本語をしゃべらない、絶対に日本には戻らないと決めました。その壁を乗り越えるのがすごく難しかったです。

米国の大学に入った時、私の大学には石川県の金沢大学と姉妹大学で1年間の留学プロ

グラムがありました。米国の大学では外国語の学習が卒業するために必要でした。早く終わらせるために、たまたま日本語学部がありましたので、日本語を専攻したのです。先生や父や母や友達にも留学した方が良いよとずっと言われましたが、絶対に日本になんか戻らないと言いました。でも母親に私が申請書を出さないなら、母が書いて出すと言われました。面接も試験も受かって、結局日本に来ることになり、大きな不安と恐怖心がありました。また、日本に戻ると、絶対また文化の壁ができるので本当に大丈夫かなとずっと悩んでいました。しかし、日本に来てからはとても楽しかったです。地域も違うということもありまして、日本語が大好きということを確認しました。子供の時から日本語はずっと喋っていたので、やはり日本と日本文化は私の体の一部だということを再認識しました。

アメリカに帰り大学卒業前、JET プログラムに申請して、日本に再びもどって来ました。最初の1ヶ月は嬉しかったです。でも途中から憂鬱になりました。大阪には外国人は少ないですし、特に黒人の女性が少ないです。それに周囲から珍しいということで、じろじろと見られることが多いです。お店に行くと、周囲から注目されるのは当然ですが、とても気になります。日本では外国人なので、日本語が話せないと思われるのです。日本語が話せないで日本語が理解できないと周囲に思われて、周りでコソコソ、ヒソヒソ話されたりするので、どう反応すれば良いのか、いつも当惑するのです。そしてカルチャーショックを感じ、孤独感に襲われます。日本語は大好きですが、「自分は日本に住む資格がないのかな」とか、「私は日本に居たら駄目なのかな」と思っていました。

結局7ヶ月間鬱病になってしまいました。結構外に出ることが嫌で、毎日の生活が家と職場で、週末も外出しないという生活が続きました。一生外国人ということで日本社会では私を受け入れてくれないと思い、日本人に対して自分自身で壁を作っていたのです。それを壊すのはとても大変でした。

それでも、職場の方は優しい方ばかりです。周りの日本人もいろいろサポートしてくれました。外見はアメリカ人で黒人だけど日本語が話せて、それを恥ずかしく思う必要はないと思うようになりました。そしたら本当に日本の生活の方がアメリカより好きで、できたらアメリカに帰らなくても良いなという気持ちになってきました。まだまだ乗り越えねばならないこともありますが、日本語が話せる外国人として、頑張りたいと思います。

Lara Makowski (ララ マコウスキ) ドイツのケルン出身

(ドイツのケルンビジネススクールからの留学生、経営学専攻)

専門は東アジア研究で、日本語も勉強しています。卒業のためには3ヶ月間のインターンシップが必要で、最初は日本で働いていました。やっと日本の会社で働くことができ、絶対に敬語を勉強しようと思いましたが、社長が私に言ったのは、ここは大家族のようなもので敬語は全然必要じゃないと言われました。だからまだ敬語はできません。会社は外国人と日本人に家とかアパートやゲストハウスを貸す会社です。この3ヶ月間のインターンシップはとても良い経験だったと思います。本当に日本の会社は厳しくて大変だ

と思いましたが、その会社は小さかったので、楽しかったです。ドイツでも一回だけインターンシップをしたことがあります。ドイツでのインターンシップではそんなに仕事をしません。日本の会社では私も本当の会社員みたいで、全然差別がありませんでした。インターンシップ後、9月から甲南大学に留学しています。今は残念ながらホストファミリーと住んでいません。私は寮に住んでいて、寮ではあまり日本語を喋る機会がないのが残念です。日本が大好きなので、今は絶対ドイツに帰りたくありません。普通の留学は1年なのにケルンは5か月だけなので、1月の終わりにはドイツに帰らなくてはならないのがとても残念です。

Patrycja Sojka (パトリーツィア ソイカ) ドイツのケルン出身

(ドイツのケルンビジネススクールからの留学生、国際経営学専攻)

専門は東アジアで日本語も勉強しています。ララさんと一緒に3ヶ月のインターンシップをしなければなりません。そのインターンシップは、ドイツの食品の卸売りをしている会社で、品川支店で働きました。今年1ヶ月間のインターンシップを同じ会社のドイツの本社で経験しました。東京の支店ですが、殆ど日本人だけが働いています。ドイツの本社は国際的な会社ですので、フランス人やアメリカ人など様々な国から来た人が働いていました。上司によっては英語だけで話します。日本の支店は日本の会社と似ています。日本に来る前、ドイツの和食レストランで2年間ほど働いたことがあります。この経験は役に立つと思いましたが、日本の会社は上下関係が強いし、コミュニケーションスタイルが全然違います。例えば、インターンというポジションがなくて、新入社員の仕事をしました。本当に始めから普通の仕事をして大事なプロジェクトも担当になりました。このインターンシップは日本を理解する貴重な経験でした。

Jeremy Pichot (ジェレミー ピシヨ) フランス出身

(兵庫県庁で5年間、その後現在の会社で勤務)

日本滞在歴は5年です。兵庫県庁の方で5年間勤めて、6年目に今の会社に入りました。日本語を勉強する動機についてですが、今ほとんどのフランス人の場合、動機はアニメとかポップカルチャーです。日本語は独学で13歳、14歳くらいの時に始めましたが、中学、高校と一人で勉強していました。大学に入った時、日本語学科がありました。私が入った時点で、すでに5、6年の勉強歴があったので、あまり勉強にはならなかったです。内容はひらがなの「あ」とかでした。ただ、大学では2つの収穫がありました。一つは私のように日本語が好きな友達をやっと作ることができました。もう一つは初めて日本人と会うことができました。それはすごく刺激的で、大学で友達と巡り会い、日本人と交流を深め、すごく活動的になりました。もう一つは、好きなことをして、生計を立てることができました。2006年に通訳の仕事をして、2007年に国際交流員として初めて来日しました。兵庫県庁国際局で国際交流に関する仕事をしていました。内容は翻訳・通訳と県内のいろんな

所で出前講座をしていました。特に問題はなく生活はバラ色ですごく楽しく、充実していました。小さい事では、日本は上下関係が非常に厳しく、物事を臨機応変に対応できません。私の考えは日本的で自分の利益を考えるより、全体の利益を考えた方が良いと思います。つまり、「小さい自分を抑えて全体の利益を考えること」を日本では学びました。

元国際交流委員と書いてありますが、今はサラリーマンです。今年の8月からその会社で仕事をしています。専門性の知識を持っているので雇われたのではなく、白紙状態から始まりました。新入社員と同じです。その会社は欧米人を雇うのは初めてで、昨年ベトナム人を雇ったのが初めてだそうでした。昨年結婚し、長期間日本に居ることの難しさを感じました。

姚 小佳（ヨウ ショウカ） 中国出身

（近畿大学商経学部勤務 助教）

2000年に留学のために日本にきました。最初は、九州の福岡で2年間くらい日本語を勉強しました。その後近畿大学商経学部に入學し、それから大学院修士課程、博士課程を経て昨年4月に助教に採用して頂きました。

まず、苦労したことから話します。両親のおかげで経済的な面で苦労したことはありませんでしたが、コミュニケーションの面では苦労しました。子供の時から自分の性格は恥ずかしがりやで、自ら積極的に交流するタイプではありませんでした。日本に来てから、特に大学に入ってから、ほとんど留学生と一緒にいました。日本人との交流は全然ありませんでした。日本人とは同じゼミで挨拶する程度でした。大学院に入ってから日本人との交流が多くなってきました。大学院の講義はいつも先生一人、学生2～3名くらいで、先生との交流も多くなってきました。

大学院の勉強は忙しくて、多くの悩みもありました。自分が知らないうちにストレスが溜まって、4月に入学して5月の中旬頃には体に異変が起きました。吐き気があるのが気になって病院に行ったら、医者に胃潰瘍だと言われました。生活を改善できたきっかけは、近畿大学大学院1年生の時に中国を訪問したことです。その時、大学の先生と一緒に中国の大学2校を訪問しました。1週間ずっと先生と生活しましたが、二日目から緊張がなくなりました。先生方と勉強の話、プライベートの話がいっぱいできました。自分の考え方も変わりました。それまでは人との間に自分から壁を作っていましたが、その壁を乗り越えたら、人とのコミュニケーションは簡単になりました。それから日本人学生と先生との交流を積極的にするようになりました。

人とのコミュニケーションで重要なのは、尊敬と信頼ですね。この尊敬と信頼は人を尊敬・信頼することだけでなく、人から尊敬されること、信頼されることが大事だと思います。例えば人に会うとき、挨拶は礼儀の基本であり、人とのコミュニケーションの第一歩であり、そこから人との交流が始まります。大学であれば先生に信頼されること、それから同僚に信頼されること、学生に信頼されることです。

次に人生の生き方について多くを学びました。特に大学の先生を心から尊敬しております。私は会計学が専門ですが、会計学を真剣に勉強したのは大学院に入ってからです。私にとって大学院の勉強は、「継続は力となり」という言葉に支えられてきました。自分が困った時、誰と相談すべきかに戸惑い、自分の将来についてずっと悩んでいました。その時私の指導教授は、こういうふうに言うてくれました。「3年間一つのことを集中すれば、成果を出せます。目標を立てて努力すれば、必ず報われますよ」研究の面で困っている時、先生の言葉を思い出して、何とか頑張ることができました。

自分の意志を鍛える為に毎日必ず1時間くらいウォーキングをします。それは私にとって一番リラックスできる時間です。ウォーキングをしている間に、「今日一日何をしたか。明日何をするか」それをずっと頭の中で整理しています。学生の時に自分のストレスを解消するために、毎週水曜日はレディースデイを利用して、必ず夜に映画を見に行きました。次に、自分の指導教授に頂いた、影響力のある言葉があります。「良い休みがなければ、良い仕事ができない。」という言葉です。ずっと仕事ばかりすれば人間ストレスが溜まります。

失敗したことは、ある日チキンナゲットを作りたいから、お鍋の中に油を入れて部屋に入りました。学校に行く準備をしていたので、チキンのことをすっかり忘れていました。いきなり部屋の中に煙が立込み、慌てて、油の中に冷たい水を入れました。そしたら煙が沢山出ました。マンションの警報が鳴りまして、消防車8台、救急車まで来ました。それで消防士、救急車や警察の方がみんな家に入りまして、家にそんな沢山の人が入った事はありませんでした。

パネルディスカッション

司会：みなさんに文化適応に関してお聞きしたいです。一般に文化適応には一つのプロセスがあります。最初はハネムーンですね、誰でも新しい文化と遭遇して幸せです。ところがある時期に異文化の中で文化ショックを受けます。その後徐々に適応しますが、もう一度ガクンと落ち込む時期 depression があります。そして最後に新しい文化を受容したり、社会に統合できたりします。その後、自分の国に帰るとリバー・カルチャーショックがあるわけです。文化適応プロセスの図を見て、自分がどの辺りにおられるのか教えてください。また最初のハネムーンの時に日本でどのような喜びがあったのかも一度整理してお答えできますか。

ホイットニーさん：私は来日2年になりますので、文化を受容して統合される段階にいます。ハネムーンの時期は8月に大阪に初めて来た時です。どこに行ってもたくさんの飲食店があり、私はすごく食べるのが大好きなので、happy でした。どこのお店も安くてすごく幸せでしたね。

ララさん：今は短い期間だけいるから、帰りたくないけど、思ったりより勉強しなければならないと思ったりするので、絶対帰りたくありません。ハネムーン状態が続いているの

かもしれません。

パトリーツィアさん：初めて日本に来た時は、少し文化ショックを感じました。それであまりハネムーンの気持ちが強くなって、苦しむことなくスイスイと来ました。今は depression ではなく、異文化受容と統合の段階に進んでいると思います。

ジェレミーさん：これはあくまで異文化適応の理論ですよ。どちらかと言いますと、ハネムーンに近い状態が5年間続いていました。そして今はある日本に対してかなり悲観的というのが現状かなと思います。

姚さん：3番目の段階かもしれません。日本に滞在している期間は長いけど、就職して2年になっていないし、正直言いますと自分の将来に対してすごく不安があります。これからどうなるのか考えないといけないし、今3番の状態です。

原田先生：単純に言うと、ハネムーンがあってドンと落ち込んで、上に上がると思います。おそらくホストファミリーの方も学生を見ていて、甲南の留学生は11月か12月頃にぐっと落ち込みますね。季節も寒くなりますし、風邪を引いたりします。その後、徐々に生活を楽しみ、帰国前になると、帰りたくないという留学生が多くなります。

司会：日本は同質社会であり、high context society ですね。“以心伝心”、“一を言えば十を知る”という、外国の人々にとっては非常に難しい社会ですね。日本人が圧倒的に多く、文脈の高い日本社会の生活の中での具体的なカルチャーショックの例があれば教えてください。

ホイットニーさん：やはり日本に来ますと9割が日本人じゃないですか。アメリカから来るとそれに慣れないですよ。この世界には多くの人種がありますが、この国ではなぜかその国の人が圧倒的に多くて、外国人として常に違和感があります。

ララさん：ドイツではセントラルヒーティングがあるけど、日本ではありません。今は学校にいるけど、ずっと寒いと思います。夏に日本に来たから暖かい服を持っていないから困っています。

パトリーツィアさん：大きな問題はなかったかも知れません。インターシップのとき、銀行で口座を作って、印鑑を持っていなかったのでサインの問題だけで1時間くらいかかりました。

ジェラミーさん：一度も日本語を直された事がなかったのですが、役員クラスの人と「うーん」とか「はいはい」とかを区別せずに言っていたら、私の上司から挨拶が終わってから「うーん」は絶対するなと言われました。それがかなり衝撃的だったので、真面目に勉強して滞在歴が長くてもまだこういう間違いがあるなというのが分かりました。

姚さん：日本人と交際しているときに、すごく思ったのは、日本の方は白とか黒とか言わず、はっきりしない灰色の返事をします。そういうことがよく分からなかったです。元々自分の性格ははっきり言うタイプなので、日本人とつき合う時そういう曖昧な態度にすご

く苦勞しました。

司会：皆さんが日本の社会での生活の中でカルチャーショックもあったわけですが、この社会で適応して生きていくのに一番良い方法があれば、教えてください。

ホイットニーさん：地域の文化に合わせる事が大事だと思います。大阪では職場の人達や友達と飲みに行くのですが、よく隣のおじさん達に必ず声かけられます。「どこから来たの」「アメリカです」と元気に答えますと、必ず焼酎とビールが一杯来るんですよ。電話番号を交換するときもありまして、ネットワークが広がり、友達とか増えてきます。大阪では考えている事をそのまま言うので、それをネガティブに受け入れず、ポジティブに受け入れています。

ララさん：もし本当に困った時があったら、寮のいろいろな外国人が住んでいるから、その人達と相談して、どうすれば良いか考える。今はスカイプができるから、本当に悲しい時は、両親とも話せるからそれがいいと思います。

パトリーツィアさん：最初に東京に住んでいた時、友達の所で泊まりました。その友達は5年間くらいドイツの友達だったので、様々な問題について話しました。大阪に引越をした時は、初めて寂しさを感じました。シェアハウスにルームメイトがいなかったので、不安を感じました。徐々にルームメイトと親しくなって、今は家族のような関係があります。みなさん日本人ですが、日本に存在する問題についても話せるので嬉しいです。

ジェレミーさん：意識的にやっている訳ではないのですが、2つの方法があって、まず一つすごく納得したのは地域ですね。5年間兵庫県を中心とする仕事だったので、それが一つの故郷になりました。もう一つは、政治やニュースとかには関心がなかったのですが、出前講座で自分の国について調べる必要がありました。それをする事によって自分の国を客観視し再認識することができました。

姚さん：一番大事と思っているのは、人とのコミュニケーションですね。簡単に言えば友達を作る事です。社会は人で構成されており、一人でできないことは一杯あります。特に外国生活をして困った事があれば友達に助けてもらうことが一番いい方法だと思います。私にとってコミュニケーションは、尊敬と信頼以外にすぐに出来る事はお酒を飲む事です。例えば学会に行くと、いろんな先生と会う機会があり、お酒を飲みながら勉強や研究の話しをし、人から助言を頂く事も出来る良い方法です。

会場からの質問：「甲南のホストファミリーを20年近くしております。留学生から原田先生の授業はきびしい、だけどとても深くて中身があるのでと何度か聞いています。どんなポイントで留学生に日本語学習を勧めておられるのでしょうか」

原田先生：チャレンジすることですね。私が一人一人と向かい合いながら、この人の持っている潜在能力や宝物を引き出そうとすることが伝わっているのだらうと思います。

会場からの質問：「家族で北京に行ったとき、中国人は必ず小さい子供に席を譲ってくださるのに感激しました。社会全体が子供を守っていく温かさを感じました。みなさんの国

では電車を乗る時に、気をつけないといけないことは何でしょうか」

ホイットニーさん：アメリカはいろいろありますけど、日本で一番しないことはドアを後ろに来る人のために開けることです。自分が出てだれかが入ってくる時に「どうぞ」と言って入らせます。

パトリーツィアさん：日本の電車の中では電話ができません。ドイツだと無駄な時間だと思うのでみんな電話したり、話したりしています。

ジェラミーさん：フランスの場合、基本的に車が中心で、日本人ほど電車で過ごす時間が少ないと思います。電車を降りる時、日本は場所を空けてくれますけど、フランスは空けてくれません。

姚さん：あまり電車は乗らないけど、財布に気をつけてくださいと言われていました。

会場からの質問：「原田先生、日本でホームステイが広まるべきでしょうか。どのようにしたら広まりますか」

原田先生：カナダに行って驚いたのは、本当に開放的ですね。ホームステイしている人に鍵を預けたまま、バカンスに行く。それを日本人が身につけるには何年もかかるし、ちょっと難しいと思いました。甲南の経験から言うと本当にホストファミリーも素晴らしいですし、留学生のマナーも良いですからぜひ広まったら良いと思います。

会場からの質問：「ジェラミーさん、独学を継続する為のポイントは何でしょうか」

ジェラミーさん：好きこそもの上手なれ。それがすべてです。

会場からの質問：「ホイットニーさん、ご自分の未来について担任の先生から指導を受けた経験が今のお仕事に影響を与えていますか」

ホイットニーさん：その時のトラウマが今も残っています。それで自分にできることが限られていると思ってしまいました。まだまだ、積極的に自分からイベントの計画をしたり、意見を聞かれたらはっきり言ったりできないですね。私の存在は大事じゃないと自信をなくしてしまいます。それを少しずつ自分で乗り越えて、やりたいことをやるべきだと思います。

会場からの質問：「姚さん、尊敬信頼したりされたりするためによいきっかけは何ですか」

姚さん：そのきっかけは自分の指導教授との間の関係ですね。先ほど言いましたように、自分の指導教授の最初の博士の学生です。そのとき、指導教授は、修士課程1年生に入るとすぐに私の将来の進路を聞かれました。私は博士コースに行きたいとはっきり答えました。修士2年生の時、指導教授は私に「近畿大学はそんなに有名な大学ではないので、推薦状を書きますので、神戸大学に行きませんか」と言ってくれました。でも自分の指導教授は良い人と思って、「近大に進学しますよ」と言ったら、「じゃ私も責任を持ってあなたのことをしっかり指導します」と答えられました。そして就職した後、先生は私に教育はどうかと尋ねられたとき、私は教育とは学生に知識を教える事と理解していました。その時、先生は、「教育は学生を教えると共に自分自身も成長すること」と言われましたが、理解できませんでした。今は教員になって、本当にそのことが分かってきました。

会場からの質問：「非常に重要で共通な質問があります。皆さんにとって日本社会で適応するということは大事かと思いますが、日本社会は今後グローバル化の中で、変わっていかねばならないところもありますよね。皆さんから見て、もし可能なら日本社会のどのような面を変えてみたいと思いますか」

ジェラミーさん：新しい職場を見て、真っ先に気づいたことがあるんですが、女性が非常に少ないです。女性の管理職はほぼいないですね。外国人とか雇っていますが、それも一つの課題で、これからいかにもっと外国人に暮らしやすい会社を作れるか。元々日本の半分を占める女性が活かされてない。これは大きな問題ではないでしょうか。

会場からの質問：「先ほどマナーの問題が出て、お聞きしたいことがあります。日本の交通機関と母国の交通機関との違いが何かあれば教えてください」

ホイットニーさん：一番感じるのはタクシーですね。日本のタクシーはすごく安心です。一人で乗る事は全然恐れませんが、どちらかと言うと頼りになります。アメリカだったら絶対に乗りません。なぜかと言うと日本みたいにちゃんと行き先に着けるか心配です。日本だと必ず目的地に着けます。

ララさん：ドイツでは日曜日映画館とか開いているけど、店とか開いていません。日本ではどこでもコンビニがありますね。コンビニはずっと開いているから、いつでも買い物ができます。ドイツのお店は夜8時くらいに閉まります。

ジェラミーさん：交通の面で、場所の狭さと関連していると思いますが、道路脇にハザードを点けて車を止める。フランスは駐車場が多いですし、困ってないので、それに驚きました。私は一回そのような駐車をして、大きな事故にあいました。

会場からの質問：「ジェラミーさんに質問があります。私も今まで何回か語学研修の留学で中国や韓国やフランスに行った事がありますが、ジェラミーさんから見た日本語の魅力は何ですか」

ジェラミーさん：非常に主観的なのですが、さまざまな言葉がある中で、日本語を聞いた時、その響きをたいへん気に入りました。日本語が綺麗と思っているフランス人はかなり多いです。もう一つの魅力は、文字の特殊性です。漢字とかも非常に面白くて素敵だと思う。言葉は発音だけ変わるのではなく、言葉を知る上でさまざまな価値観、対人関係の見方、世界の見方があるので、たまたま日本語の波長が合うと思います。

国際言語文化センター柳原先生からの質問：「私はドイツで携帯電話が普及するまで、ドイツでの生活に対してハネムーン状態が30年程続いていましたが、携帯電話が普及してから非常に不愉快な面があるんです。とにかく電車の中でよくしゃべります。ホテルの朝食でも喋る。注意しても何でだと言われます。不快感と快感の問題になると思うのですが、ドイツで留学していた時に皆大講義室で教授の声が聞こえなくなるくらい、思い切り鼻をかむんですね。音に関する感覚というのが、日本人とドイツ人、あるいは日本人とヨーロッパ人、その辺に関して快・不快の問題について教えてください」

パトリーツィアさん：ドイツと日本ではうるさいことはちょっと違いますね。日本も結構

うるさい国だと思います。駅では「まもなく電車がまいりますので」と繰り返します。そんなアナウンスが少し多すぎて、「お手洗いは右が男子、左は女子のお手洗いがあります。ご注意ください」などが必要かどうか疑問です。

会場からの質問：「各国の子育ての比較に関して違いがあると思うのですが、どうでしょうか」

ホイットニーさん：日本では、百貨店にいるときに子供が暴れたりしますが、その状況を親は全くコントロールできないですね。アメリカでは他人に対して大変迷惑で、そのような場合は子供の躰がなされていないと考えます。そういう場合周りに聞こえても子供に「静かにしなさい」と言います。それを日本ではしないですね。周りの人も注意しないですね。アメリカの場合、親が言わなくても周りの人々が何か言います。

姚さん：日本は少子化社会と言われていています。でもどこに行っても子供を連れているところを見ますが、中国では夫婦が買い物に行くならば子供を両親の所に預けるんです。

司会者・閉会の挨拶（中村耕二）

今日は有難うございました。やはり異文化適応のプロセスを様々な形で皆様方経験なさり、それぞれに文化の壁を超える方法を見つけられたように感じました。さらに、適応プロセスのなかで、先ほどジェラミーさんが言われていたように、誰もが自己の identity や自文化の再発見を経験します。私はアメリカで勤務して、イギリスでも研究したり働きましたが、異文化適応能力の伸長と共に自分の文化や自分の identity をきちんと確認し、自文化を説明できる能力も大事だと思います。同時に、今のグローバル化が進み、多文化社会に向かう世界においては trans-cultural（文化を超える）trans-national（国家を超える）視野も大事になってくると思います。最後に先ほどサイドの（想像の故郷）という発想の話をしましたでしたが、私にはシアトルとヨークシャーに故郷があります。そのような複数の故郷を持つことは人々との交流や平和にも繋がってくると思います。最近 diplomatic relation（外交）が非常に難しいですね。しかし世界の市民同士の personal relations（個人レベルの関係）は限りなく進んでいます。21世紀は国民国家に左右されるのではなく、同じ地球市民として国家や異文化の壁を超えて行かねばなりません。私達も、自文化の理解を深めながら多文化や異文化への適応力を養う努力が必要だと思います。本日は原田先生の貴重な講演、パネリストの皆さまの異文化体験を通しての貴重なご意見と異文化適応の知恵、また会場からの皆様との意義ある質疑応答、誠にありがとうございました。これにて閉会とさせていただきます。（文責：津田信男・中村耕二）